

天使のつぶやき・結

ある時 天使はつぶやきました。



「僕はどうしてここにいるんだろう？」

神様が答えました

「おかえり…」

もう何十回、何百回…

いや何万回このやり取りを繰り返して来たのでしょうか？

神様は尋ねられました

「今度はどうだった？」



「...上手くいかなかったよ。色々方法を変えて何度やつても...

ひとりひとりに何故この時代にその姿で、今の環境で生まれて来たのか？

それは生前あなた自身が望んだことで...

この人生で得られる体験は唯「無二」で掛け替えのないものなのだから...と

そう幾ら意義を説いても疎ましがられるだけで...」

「おやおや...」



君自身は楽しもうとはしなかったのかい？」

「楽しもうとしたよ。」

賛同してくれる人が集まってコミュニティも出来た。

でもそれを疎ましく思う人たちもいて争いになった。

「誰も争いなんて望んでいないのに……」

「……………」



「哀しかった。」

最後は異端視されて迫害されてしまった。

何故なんだろう？

人生の意義を知っていれば悲しみや苦しみに悩む必要もなくもっと人生を楽しめるのに……」

「これは前にも話したけど…余計なお世話だったじゃないかな？」

「だって誰だって悲しみや苦しみが少ない人生の方がいいじゃない？」

「そうだね。でもそれをわざわざ体現しようとして生まれて来た者もいたんじゃないかな？」

「……」

「悲しんだり苦しんだりしている人を助けてあげたい気持ちは分かるけど、

それではその人の人生の体現を疎外することにならないだろうか？

「悲しみも苦しみも…その次に繋がる大いなる歓びのきつかけだったとしたら？」



「…何もしない方が良かった？」

「何とかしてあげたい気持ちは伝えてもいいんじゃないかな？」

その気持ちだけでも人は随分救われるよ。

君だって側で支えてくれた人に何度も癒されたんじゃないかな？

「…うん。」

でも気持ちだけでは何も変わらなかったよ。

何とかしてあげたい人がいっぱいいたのに…」



「変えられるのは本人だけだよ。」

幾ら周りがお膳立てしても本人がその氣にならなければ何も変わらない。

人を変えるきつかけを与えたい。人の希望になりたい。

前にも話したけど、それなら先ず君自身が輝かないと……」

「……うん。」

「毎日を辛い思いで過ごしている者には番のクスリだよ。」

「こんな状況の中でどうしてあの人はあるのにキラキラと輝いているんだろう？」ってね。」



「そう心掛けていたよ。そうしたら仲間も増えたけど……疎む者も大勢いた。」

「そして最後は迫害されてしまった。」

「ねえ…どうすればよかったんだろう？」

「この会話ももう何万回と繰り返してきたのを覚えているかい？」

「…なんとなく」



「これは姿や環境を変えて向こうの世界で何万回と試みて来た君の…」

いや、私たちの課題のひとつだよ。

君がさっきまで転生を繰り返していた幾つかの時代では

この課題を克服するにはまだもう少し時間が掛かるだろうね。」

「…なんだかもう疲れたよ。」

「疲れたなら休めばいいよ。暫く休んだら、また挑んでみるかい？それとも…」

「それとも？」

「もう十分に今の課題に挑んできたようだから…そろそろ次の段階に進んでみるかい？」

「次の段階？」

「そう、今度はもう少し光の方へ行くよ。」

「光…って？」

「そう、光の中の方へ。」

「そこには何があるの？」

「今まで通りしてきた向こうの世界で十分に鍛錬した魂たちが向かう次の世界だよ。」

「次の世界？」



「そこでは前にいた世界より物質は少なくなる。

君が生懸命説いていた人生の意義は既に誰もが知っているよ。

環境をそのまま受け入れて生きるべきなのか？変えて行くべきなのか？自身の課題としてね。」

「…あつたんだ。そんな世界が…」

「感覚的にここに近い世界と言えるかもしれない。」

「そっつて…天国なの？」

「いや、向こう世界ではそう呼んでいたかもしれないけど、天国^{ヘブン}などはないよ。地獄^{ヘル}もない。

それはそれまでの経験による意識が作り上げている世界だよ。

あるのは全てが繋がった魂の帰還する場所だけだ。」

「帰還する場所…」



「これも前に話したけど、私たちはひとつだ。」

君が向こうで得た体験は私の体験でもあるし他の魂の体験も然りだ。

こうやって語らうためにふたつに分かれて対話をしている。

それは自分自身を知るため、さっき君が居た向こう世界では何十億と分かれていたろ？

それは性別も年齢も環境も全てが違う条件の、私であり君だよ。

同情することもあれば敵意を抱くこともある。

それまで関わりがなかった者同士が相手を理解することで己を知る。

自分自身の素晴らしいところや理解してもらえないところを知り、どうすればいいのかを考える。

その積み重ねが魂を磨いてゆく。

「魂を…磨く。」



「そう、課題の達成度は関係ない。そりゃ達成されることに越したことはないけど…」

私には何度も転生して挑んでいた君の魂がピカピカに輝いて見えるよ。

そんな魂たちが集まっているからあんなに輝いている。

あそこからまた新たな大きな生命が生まれそれぞれの体験が繰り返されてゆく…」

「大きな生命？」

「そう…星だよ。」

「たくさんのおれが集って星が誕生するんだ。」

恒星だけではなく惑星となつてそこに生命が宿り、今度は転生して来た者たちを見守るんだ。」



「そんな仕組みだったの？」

「これはずっと前から昔…いや、遠い未来から繰り返していることだよ。」

「そこには時間はないからね。」

「あ…」

「さあ、君も向かおうか。今までは違った次の世界へ！」









